

ウィーン大学の日本学 ——その阿蘇研究プロジェクトについて——

横 道 誠

0. はじめに

本稿ではウィーン大学の日本学（ヤパノロジー）について、現在展開されている共同研究プロジェクト「阿蘇 2.0」を焦点として考察する。まず欧米の日本学史を概観し、ついでウィーン大学の東アジア研究所日本学部門でどのような研究テーマが探究されているかを紹介する。加えて、「阿蘇 2.0」では阿蘇に暮らす人々の幸福度がテーマ上の核心だということが説明される。さらに「阿蘇 2.0」を進める人々のうち3名の紹介がエスノグラフィーとして提示される。ウィーン大学で日本学を学ぶ学生たちが参加した現地調査の要約が示され、筆者自身の阿蘇旅行がふたたびエスノグラフィーとして提示される。阿蘇在住者へのインタビューが補足され、最後に日本学と筆者が専門家として関わるドイツ文学研究（ゲルマニスティク）が比較されつつ、論述を閉じる。

1. 日本学史の概観

エンゲルベルト・ケンプファー、通常は「ケンペル」として知られてきたこのドイツ人は、1690年から日本に滞在し、長崎出島のオランダ商館医として活動した。ケンプファーは日本の記録を『現代日本』と題するドイツ語の草稿として残し、これが死後に英訳され、1727年に『日本誌』として翻訳され、ヨーロッパでの日本学（英：Japanology, 独：Japanologie）が始まった。フランスのドゥニ・デイドロが編集した『百科全書』は、日本に関する記述を『日本誌』フランス語版に大きく拠っている。

ヨーロッパの日本学が新たな草創期を迎えたのは、ドイツ人のフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト（通常は「シーボルト」として知られる人物）がケンプファーから100年以上のち、1823年から1828年までオランダ商館医として収集した文学作品、民俗品、動植物に関する資料を持ちかえったときだった。シーボルト以来、ヨーロッパの日本学は軌道に乗り、1855年、オランダのライデン大学に世界初の「日本学科」が設置された。

明治期を代表する外国人の日本学者、イギリスからやってきたバジル・ホール・チェンバレンは、『日本事物誌』（1890年初版、以下に引用するものは第6版の翻訳）で、書いている。

日本に関する世界の知識に大きな貢献をした多くの偉大なドイツ人の中で、シーボルトがもっとも偉大であった——その他に著名な人びとには、一七世紀にケンペルあり、現代においてはラインがいるけれども——。もし小人物が大人物を批評することが許されるならば、著者はここに記しておきたい。ケンペル、ツンベルク、シーボルト（そしてラインさえも）などに代表される唯一の弱点は、歴史や言語の問題について批判的能力が不十分であるということである。確かに、日本の原資料に当てはめるだけでは充分ではない。日本の原典そのものも、きびしい批評の下にさらさなければならない。この仕事が行なわれるのは、サトウ、アストン、そしてマードックに代表される英国派を待たなければならなかった。彼らは日本語を科学的正確さをもって調査し、ケンペルやその追従者達が鵜のみにした歴史と称するものが、実はたわい無い言い伝えを集めたものにすぎないということを一步一步証明したのであった。しかし、最近ではリース、フローレンツ、その他の学者が、この方面でもドイツの学問のために輝かしい栄冠を獲得している（チェンバレン 1969: 210-211）。

長崎に滞在したドイツ人たちが中心になって始まった日本学は、明治期に日本に滞在したイギリス人によって主導されるようになった。しかし、さらに第二次世界大戦の時期から主導者はアメリカ人たちの手に移ることになる。20世紀後半を代表する日本学者のひとり、ヨーゼフ・クライナーは、2000年の書物でつぎのようにまとめている。

ヨーロッパでは昔からよく「はじめに言葉ありき」と言われているが、ある民族・文化の研究もその通りに、まず言葉を中心にして、その言語学的な研究を踏まえた上で、その民族文化のすべての知識が再認識されている古典文学や文献を研究してきた。このような研究の伝統は十九世紀半ば頃に特にドイツで発展したが、その方法論によって文献学と名付けられた。最初はヨーロッパの古典学、すなわちギリシャ・ローマの古代文化を対象としていたが、後にはまずインドを手始めに、アジア諸民族の文化もその研究対象とされた。ギリシャ語のロゴス「言葉」という名詞を用いて、それぞれインドロギー、シノロギー、そしてヤパノロギーという学問が確立された。／明治時代にヨーロッパから初めて来日した研究者は、江戸時代の国学の伝統に接し、これにヨーロッパで発展していた文献学と非常によく似た要素を見出して、まず日本の古典文学の研究から出発した。例えばイギリスのアーネスト・サトウ (Ernest Satow) は、その立場から国学者に弟子入りし、一緒に研究を進めた。／また、ドイツ人に限ってみると、明治時代に東京帝国大学でヨーロッパ古典文学を教えていたカール・フローレンツ (Karl Florenz) は弟子たちの協力を得て、古事記、日本書紀、古語拾遺などを次々に独訳し、それによって日本の文化をドイツに説明しようと試みた。そして、戦後しばらくしてからドイツで再び日本研究を進めたハンプルクのベンル (Oscar Benl)、ミュンヘンのハミツチュ (Horst Hammizsch)、ベルリンのエッカルト (Hans Eckhardt) 教授等も、日本古典文学を中心に研究し、講義を行ってきた。／それとは対照的に、戦時中に著しい発展

を遂げたアメリカにおける日本研究は、必要に迫られたために最初から社会学的な立場からの日本研究を中心とした、現代日本の民族、社会、そして文化を対象としてきた。このような伝統は、ヨーロッパの日本学（ヤパノロジー）と違って、日本研究（ジャパニーズ・スタディーズ）と名付けられ、昭和四十年代後半から五十年代にかけて、ヨーロッパでも注目されるようになってきた（クライナー 2000: 36-37）。

社会学を核心としたアメリカの「日本研究」（Japanes studies）が、ヨーロッパの伝統的な文献学的「日本学」（Japanology）を圧倒するようになり、日本学も徐々に日本研究に似たものへと衣替えしていった。社会学が文学研究や言語学に勝利したというだけでなく、さまざまな学問的方法が日本学を刷新するために導入された。現在の日本学は、日本を焦点とした社会学、文化人類学、文学研究、言語学、歴史学、宗教学、哲学研究、経済学、政治学などの総合的学問と言うべきものに変貌している。日本人の学術的研究者が母国の日本について研究する場合には、専門分化した知に縛られることが普通だが、ヨーロッパでは外国人として日本を包括的に理解することが第一に望まれているため、その日本学は専門の枠を越えた形で、ダイナミックな躍動を見せている。

2. ウィーン大学の日本学

以下にウィーン大学の日本学について概要を記述するが、典拠は特に断りのない場合、ウィーン大学東アジア研究所日本学部門の公式ウェブサイト に拠っている (<https://japanologie.univie.ac.at/>)。東アジア研究所は、それまでの日本学研究所と中国学研究所を合同することで2000年に誕生し、日本学、中国学、韓国学、東アジア経済社会学の4つの部門から成っている。日本学部門では、重点的に取りくまれてきた人文学的研究の方向性がいくつかあるため、それらを確認しておこう。

第一は、ディアスポラとトランスナショナリズム。海外から日本に移住してきた人々の調査が、社会学的かつ文学研究的に遂行されてきた。第二は、視覚文化。浮世絵のマスメディア的機能、日本映画史、マンガとアニメなどが考察されてきた。第三はジェンダー問題。女性の言語運用、女性団体、助産師、シングルマザー、新宗教の女性教祖、サブカルチャーの女性のイメージ、「男らしさ」の規範形成などが考察されてきた。第四は高齢化問題。高齢者の死生観、祖先崇拜の社会的機能、日本の昔話や説話文学のなかの高齢者イメージ、三世代世帯の生活形態、高齢者に関する社会政策と社会問題、年金制度などが考察されてきた。第五は娯楽。労働者の休日活動、海外旅行、スポーツ関連の催し、ギャンブル問題、登山の歴史などが考察されてきた。

以上は人文学に社会科学を部分的に導入したものと言えそうだが、ウィーン大学でより重点的に取りくまれているのは、社会科学に人文学を融合させた研究で、現在は、大規模な阿蘇研究が実行されている。なぜ阿蘇なのか、と不思議に感じるだろうか。1965年にウィーン大学に日本学研究所が新設され、スタッフだったアレクサンダー・スラヴィク、ヨーゼフ・クライナー、エー

リッヒ・パウアー、ゼップ・リンハートらは最初の大規模な研究プロジェクトを阿蘇研究に定めた。以来、阿蘇研究がウィーン大学の伝統になった。

クライナーによると、中心人物だったスラヴィクは、古代の中国や朝鮮半島と、日本文化の起源と想定される九州地域の関係に関心を抱き、阿蘇火山や阿蘇の神話と伝説に惹かれるようになっていた。現在の日本でも、阿蘇は古代史に関心がある人の興味を大いに引き、邪馬台国が阿蘇にあったとか、神々が住まう高天原とは阿蘇のことなのだと考える者も——専門家はともかくとして——珍しくない。スラヴィクの本来の専門は文献学だったが、かつて1920年代からウィーン大学に留学していた文化人類学者の岡正雄——5歳下の石田英一郎らとともに日本の戦後の文化人類学を主導した人物——と出会うことで、文化人類学の世界に導かれた（クライナー 2000: 18-23）。母校のウィーン大学に着任したスラヴィクは、初期からの関心である阿蘇を、転向後の専門だった文化人類学に結びあわせた。そうして、彼はすでに訪れたことがあった初期からの関心対象の阿蘇地域を、共同研究の標的として選択したのだった。阿蘇研究にいたるまでのウィーン大学の日本学について詳しくは、ヨハネス・ヴィルヘルムの記述を参照されたい（ヴィルヘルム 2020: 232-234）

1968年から翌年にかけて実施されたフィールドワークでは、阿蘇の歴史、物質文化、宗教、社会経済、集落社会の在り方、社会的マイノリティ、自然の特徴などが総合的に調査された。彼らは、各集落を対象とした微小的な分析（ミクロ視点）や、九州全域や日本国といった巨視的な分析（マクロ視点）を避けて、中間的な分析（メゾ視点）を導入し、熊本地方の内部の諸地域に焦点を絞りこんだことを自分たちの研究の特徴として自負している。このフィールドワークから数年ほど続いた「阿蘇1.0」については、クライナーの著作およびヴィルヘルムの論文（2020: 235-238）を参照されたい。

2014年、新たに日本学部門の教授に着任していたヴォルフラム・マンツェンライターは、かつての阿蘇研究を復活させ、継承することを提案し、同僚たちの支持を得た。「阿蘇2.0」（Aso 2.0）という名称については、ヴィルヘルムが東日本大震災後の石巻での町づくり団体「Ishinomaki 2.0」を参考にして考案したもので、この名称ならば、かつてのプロジェクトを「阿蘇1.0」と呼ぶこともでき、区別しやすいことから定着した（ヴィルヘルム 2020: 238）。新しいプロジェクトは、阿蘇地域をモデルとして、現代の日本の地方を変貌させている社会経済的、政治的、社会文化的な発展を、包括的な学際的研究に把握することが狙いだった。行政的には、阿蘇は複数の山頂を持つ阿蘇山を中心として、北部（阿蘇谷）と南部（南郷谷）に分かれる。全体はかつて阿蘇郡と呼ばれていたが、2005年に一部の地域が阿蘇市を結成し、郡から離脱した。阿蘇市はほかの阿蘇郡の自治体とともに北部にあり、南部にはやはり阿蘇郡があって、南阿蘇村や高森町などが属している。マンツェンライターとバーバラ・ホルトゥスは、2015年に初めて阿蘇を訪れ、上野真也（熊本大学）、柴田祐（熊本県立大学）、熊本県知事、阿蘇市職員などとのパイプをつなぎ、現地ではヴィルヘルムが共同研究が問題なく進捗するように準備に励んだ（ヴィルヘルム 2020: 239-241）。以後の詳しい展開についてはヴィルヘルムの論文を参照されたい（2020: 241-243）。

日本では従来から都市への人口流入が続いており、国連の報告書によると、すでに2014年

には 93.0% が都市部に住み、2050 年には 97.7% が都市部に住むだろうと予想されている (UN 2014: 52)。つまり、農村地域に住む日本人はすでに圧倒的に少数派であり、今後はその方向性がさらに進行するのだ。この状況のなかで、日本人の幸福感に注目したホルトゥスとマンツェンライターは、日本の農村研究の意義をつぎのように語っている。

農村部の幸福に対する私たちの関心は、現代日本の農村の生活についての相反する見解から派生した。その見解は、農村が不可逆的な経済的衰退に陥っているというディストピア的ビジョンと、日本の農村が伝統的価値や制度の宝庫だという、あるいは個人の自己実現のためのオルタナティブな空間だという郷愁に溢れたロマン化のあいだで、振り子運動を見せている。日本の農村では、幸福度や生活満足度が都市部よりも低いということではなくて、逆に住民の幸福に影響を及ぼす一連の要因が農村にあると考えるだけの十分な根拠がある (Holthus/Manzenreiter 2020, 151)。

日本の農村は満足と不満足の間での張りつめた中間域を生きている場になっている、というわけだ。

3. 阿蘇の幸福度

ウィーン大学のラルフ・リュッツェラーが阿蘇研究プロジェクトを統括してきた。リュッツェラーは阿蘇の人口動態を考察し、個々の地域の格差に注意を向けている。マンツェンライターは繰り返し阿蘇を訪れ、参与観察やインタビューによって、阿蘇に住む住民の幸福度を調べてきた。ホルトゥスは幸福度の地域差を検証した。加えて、ディオニシオス・アスキティス、シュテファン・フンズドルファー、アントニア・ミゼルカ、ゼバスティアン・ボラク＝ロトゥマンの博士号取得者チームが連携して阿蘇の社会的資本が主観的幸福感にどのような影響を与えるかについて多角的に分析し、しかもそれを全国の農村部の状況と比較検討している。全体として、阿蘇の人々の幸福度を、さまざまな手段を利用して立体的に把握し、かつそれを日本の普遍的問題として提出することにこの共同研究の狙いがあると言える。

マンツェンライターによると、阿蘇と熊本のほかの農村地域を比較すると、期待（家族、雇用、教育）、誇り（自然、遺産、共同体）、富（収入、消費、住居）、信頼感（健康、環境、安全性）の数値のすべてで阿蘇はほかの地域を上回っていた (Manzenreiter 2018: 58)。マンツェンライターは、これは阿蘇が熊本県の中心に位置する都市部の熊本市から比較的近い上に、熊本第一の神社と見なされる阿蘇神社を擁していて、それらが在住者の心情に反映しているのだと推測する。

都市というものは物質的な満足を与えるのに優れ、農村というものは環境および共同体に関連するニーズを満たすのに適している。(中略) 物質的な生活条件の満足度が都市部よりも高いのだが、これは熊本市との距離が近く、教育、労働、収入、消費の面で熊本市の存在感

が大きいと思われる。熊本で阿蘇ほど地元の伝統に対する誇りが強い地域はないと言われているが、それは阿蘇神社が大きな要因であると推測される（Manzenreiter 2018: 59）。

またマンツェンライターとホルトゥスは、阿蘇のうち農村部の出身者のほうが主観的な幸福感が低い傾向にあることを指摘する。

私たちは（中略）村の出身者である場合、主観的な幸福感が低い傾向があることに気づいた。その理由として、村という共同体での生活がより重要視され、地方行政への期待と実際の村の（自身らによる）統治の経験とのあいだに大きな溝があることが考えられる。このことは、高齢化と人口流出による土地と共同体の機能の崩壊（それは長期的には都市部にも影響を与えるが）、より「農村的な」特徴を持つ地域の存立と幸福感に、大きな打撃を与えていることを示唆しているだろう（Manzenreiter/Holthus 2021: 82）。

以上の研究を踏まえて、アスキティスらの博士号取得者チームは、従来の幸福研究が、そもそも複雑なはずの「幸福度」という概念を単純化してきた、という問題提起する。このチームは、日本学、社会学、心理学、政治学という多方面からのアプローチを用いて、農村部の政治参加、地域社会の生活感、住民の人柄、社会ネットワークといった相異なる次元を統合しつつ「幸福度」を問う。「人口減少、およびこれに付随する諸問題に苦悩する農村部で、社会的資本は主観的幸福感にどのような影響を与えるのか」、「政治参加、共同体意識、社会的ネットワークへの帰属意識、人柄は、さまざまな尺度によって図られるべき幸福度に、どのような影響を与えるのか」。そして彼らは仮説を立てる。「社会的資本は、農村部の主観的幸福感に大きな影響を与えている」、「人柄（たとえば外交性）などの個人的要因が、社会的資本と幸福度の関係を緩やかなものにしていく」、「学際的なアプローチによって、量的に測定されたデータと質的な幸福理解を統合する仕方で、主観的幸福感への高度な理解をもたらす」。

博士号取得者チームは、阿蘇市、南阿蘇村、高森町をフィールドとして、研究内容を分担している。質的研究としては、ミゼルカが参与観察を、ミゼルカとポラク＝ロトゥマンが対面インタビューを、フンズドルファー、ミゼルカ、ポラク＝ロトゥマンがいくつかの現地住民との討論を担当する。量的研究としては、アスキティスとフンズドルファーが社会的資本としてのネットワーク、共同体意識、政治参加の度合いを分析する。

アスキティスらは、「喜んでもらう」ことを重視する住民の意識に注目し、人間関係が重視されていると同時に、自然と歴史の深い文化が、阿蘇の幸福度（「生き甲斐」）に関係していると考える。

初回のインタビューでは、回答者の多くが、他人を幸せにすることで幸福を共有するという想念について語ってくれた。このような理解——インタビューに答えてくれた人たちは、し

ばしば「喜んでもらう」という言い回しを使った——は、人間関係がいかに個人の幸福の中心的な要素かということを示している。このことは、幸福に関する個人的な説明ですら、行為する人間と人間以外の環境とが複雑な相互作用の網の目にかかっていることを意味している。インタビューに答えてくれた人たちにとって、とりわけ豊かな自然環境と文化的背景は、アイデンティティと「生き甲斐」の基準点であると同時に、それらがどのように抗争しているかについて、光を当ててくれるように思われる。回答者の全員が、この地域が将来どのようなべきか、また、地域社会を形成する上で自分たちがどのように具体的な役割を果たすべきかについて、同じように考えているわけではない (Askitis et. 2021: 168)。

まず質的調査（インタビューなど）を踏まえてアンケートが作成され、それが量的データとして計算されていく。

評価方法は自己記入式のアンケート調査を使い、構造的および人口的に異なる地域の複数の村を対象に選び、サンプルサイズを大きくすることで、地域内の比較を可能にした。アンケートの作成過程では、まず質的調査チームから探索に必要な情報を得た。その情報には、幸福の構成要素についての検討事案、特にそれが現地での幸福の理解にどのように適合するかという問題に関する事前テストを踏まえたフィードバックや、質的インタビューをつうじてアンケートの選択項目に対していかに解答するか事前テストを実施し、その結果として得たフィードバックが、含まれている。これは、地域にとって重要度が高いと予測される幸福の因子や要素、背景となる要因（地域の生活条件や自然環境）のマッピングに役立ったし、回答者の人口統計、実施時期、実施に協力する現地パートナーに鑑みて、調査地域特有の事情に合わせたアンケートを調整しながら作成することができた (Askitis et. 2021: 170)。

質的調査と量的調査の融合というだけでも意欲的だが、さらにチームは阿蘇を超えて日本全国の農村に視野を広げる。

量的データは、農村の幸福感とそのさまざまな側面を、日本での個人的資源のネットワーク、価値観、個性と関連づけながら、より包括的に概観することができるようにする。今後は、阿蘇の事例で検出されたパターンが、日本の全国的な調査結果に照応するかどうかを調査し、そして農村社会学や文化心理学の大きな文脈の中に位置づけていくつもりだ (Askitis et. 2021: 171-172)。

研究の完了と最終的な成果の報告が期待される。

4. エスノグラフィー（1）―「阿蘇 2.0」への従事者と私

ここまでは論文の体裁上、関係者を呼び捨てにしていたが、以下の記述は私自身のフィールドワークを基礎にしているため、関係者を愛称や敬称つきで呼ぶことにしたい。

筆者はサバティカル期間中の2021年12月から2022年3月までウィーン大学東アジア研究所の客員研究者としてオーストリアに滞在した。マンツェンライター教授が受け入れ教員となり、招聘状を発行してくれて、研究滞在用のビザを取得することができた。デニス（私はアスキティスさんをこの愛称で呼び、彼は私を「マコト」と呼んだ）がウィーンでの研究生生活や大学施設の利用に関するさまざまな情報を提供してくれ、一部の手続きを代行してくれた。ゼバスティアン（ボラク＝ロトゥマンさんは私を「横道先生」と呼んだため、私は「デニスと同様にマコトと呼んでほしい、私もゼバスティアンと呼ぶ」と伝えた）が、「阿蘇 1.0」と「阿蘇 2.0」で蓄積されたさまざまなデータを提供してくれた。ウィーン滞在中、マンツェンライター教授と1度、デニスと2度、ゼバスティアンと1度面会した。

マンツェンライター教授はドイツのクレーフェルト出身で、日本学を志望した理由を尋ねると、「私が若かった頃、日本の勢いはすごかったからね」と語る。世界経済の歴史を顧みると、日本の国内総生産(GDP)は1966年にフランスを、1967年にイギリスを、1968年にマンツェンライターの母国、西ドイツを追いぬき、アメリカに次ぐ世界2位に躍りでた。これらは教授が幼児だったころの出来事で、さらには教授がウィーン大学で社会学を学んだ1989年から1993年という時期は、日本経済の最盛期と重なり、日本の科学技術力は世界最先端を走っていたから、青年時代の教授が日本の国際的存在感に圧倒され、専門家を志したのは不思議ではない。

面会場所は大学校内のイタリア料理店だったが、俳優のような整った顔立ちと、全身をユニクロの服で固めた装いが、謎めいた若々しさを見せていた。私が村上春樹について論文を書いていることを伝えると、『騎士団長殺し』でウィーンとナチズムの関係が話題になっていたことを的確に指摘し、日本の作家では川上未映子が好きだと語った。私と同時期にサバティカル期間を享受していて、コロナ禍のために日本に行くことはできなかったが、東アジア研究所の所長としての激務から一時的に解放され、英気を養えたと喜ぶ。筆者は交流の深いグリム研究者の野口芳子先生から「お世話になる人にあげると良い」と立派な扇子を贈られていたため、これを教授に進呈した。

ウィーンに渡航したとき、オーストリアはコロナ禍に対する第4回目の全国封鎖（ロックダウン）が始まった時期だった。そのため、デニスともなかなか面会できなかったが、1ヶ月以上が過ぎて会うことになり、研究所内の日本学部門の敷地を案内してもらった。蔵書コーナーに並んでいる日本の書物や、日本に関するドイツ語と英語の書物が混沌としたラインナップと感じられ、興味深かった。博士号取得者チームの部屋に滞在していたミゼルカさんに紹介してもらい、歓談していると、研究所の「水」というシンボルマーク（次ページの図）が話題になった。驚くべきことに、「水」という漢字を分解すると中国学（Schinologie）の「S」、日本学（Japanologie）の「J」、韓国学（Korealogie）の「K」に見えると説明された。シンボルマークをよく見ると、実際

にそのようにデザインされている、ウィーンにはドナウ川に恵まれた水の都という側面もあり、中国、日本、韓国は伝統的に漢字文化圏と呼ばれるから、ウィーン大学東アジア研究所にはふさわしいシンボルマークなのかもしれない。



帰国直前に「待つの間」という部屋（皇居にある「松の間」のもじりか）でデニスおよびゼバスティアンと昼食を食べた。ウィーンで体験したことを報告したが、滞在中の体験については『ある大学教員の日常と非日常——障害者モード、コロナ禍、ウクライナ戦争』（晶文社、2022年10月）に詳しく記したから、ここでは省略する。面会后、私は彼らがどのような動機を持って日本学に向きあっているのかを知りたいくなり、ドイツ語によって書面でインタビューした。

デニスはドイツのハンブルク出身で、ギリシア系の出自を持つ。子どもの頃に日本人の友だちがいて、箸とおにぎりの香りが記憶に刻まれている。『星銃士ビスマルク』や『美少女戦士セーラームーン』といった日本のアニメを観たことがあり、その異文化のデザインセンスに奇妙な印象を受けた一方で、アメリカ風のキャラクター・デザインを導入した『キャプテン・フューチャー』にはなじみやすく、夢中になった。年齢があがると、美術への興味が増し、日本の水墨画、書道、建築に傾かれるようになり、グラフィック・デザイナーの田中一光と建築家の丹下健三に関心が深い。九州地方のほか、東京、茨城、北海道、京都を何度か訪れたことがあって、初めは日本人のふだんの礼儀作法が強く印象に残ったが、そのあとには日常生活の快適さや大都市の夜の安全性に感銘を受けたと語る。

阿蘇と幸福度に対する思いをこう語る。「環境の災害が多発しているにもかかわらず、このような地域に住む人々がたくましく生きていることに魅力を感じます。長年の研究を経ても完全には解明されていない、公式および非公式の社会規範や制度の複雑さにも惹かれます。文化の基準や社会的空間が大きく語の場合、幸福度を国際的に比較するのは困難です。しかし、日本人の幸福感が欧米での幸福感と異なっているのはたしかで、それは個人的というよりは集団的な傾向があり、休息に飢えていて、アンビヴァレントで、しかしバランスが取れているかもしれません」。

ゼバスティアンはウィーンで生まれ育った。小学生のときに『ポケットモンスター』に夢中になり、友だちとカードを交換したことがある。玄米茶や煎茶、日本料理に接したこともあった。13歳くらいから『るろうに剣心』などの日本のマンガを読みはじめたが、まだ日本文化に対する特別な意識はなかった。高校生のときに日本語のアニメを言語のままで友だちから見せてもらって衝撃を受け、独学で日本語を学ぶようになり、日本社会に対する情報を収集した。姉は『葉隠』や北斎の浮世絵に関する絵本を贈ってくれた。現在では、多和田葉子、大江健三郎、村上春樹などを好んで読む。ウィーンのナッシュマルクトの近くにある寿司屋で日本語で注文し、店員が日本語で答えてくれたことがあって、うれしくて覚えている。高校を出たあとは東京で日本語学校に通った。その後も毎年のように夏に、北海道から沖縄まで日本の農村部に出かけるようになった。パートナーと和歌山の農家で数週間ほど生活したことがあり、農作業を手伝ったり、山

羊や犬の世話をしたり、地域の催しに参加したりした。受け入れてくれた家族に深く感謝している。

阿蘇と幸福度に対する思いをこう語る。「『阿蘇 1.0』の研究を見ると、当時も地域ごとに異なる社会構造があったことがわかります。暮らし方、伝統の守り方に多様性があるのです。近年では都会から夢を求めて阿蘇に移住してくる若者が増えています。その結果、地域がさらに変化し、人々のあいだにさまざまな力学が働くようになっていて、ときには厳しい対立もあります。これだけの歴史がありながらも、いやあるからこそ、阿蘇は変貌しつつあります。インタビューをしていると若者と高齢者のあいだに、また新しく移住してきた人と、長く住んできた人のあいだで、幸福度はかなり異なっています。共通するのは、主観的な幸福感にとって、対人関係が重要だということです。それぞれの人に個人的な欲求はありますが、地域社会に溶けこむために、調整を図っているのです」。

5. ウィーン大学の学生たちによる現地調査

2018 年 7 月後半、マンツェンライター教授とミゼルカさんがコーディネーターとなって、ウィーン大学で日本学を学ぶ学生たちが、阿蘇で約 2 週間の研修旅行に取りくんだ。参加した学生たちのブログが残されているため、それを要約してみよう（Aso 2018）。

彼らは事前に、「阿蘇 1.0」での研究成果を全員で共有し、当時使用されたアンケートを改めて整理した。九州の農村社会を調査してきたイギリスの文化人類学者ローズマリー・ジョイ・ヘンドリーと合流し、対話を重ねた上で、アンケート用紙の項目を選定していった。1 日目、一行は熊本市にある熊本県青年会館に集合した。2 日目、一行は熊本大学に赴き、ヨーゼフ・クライナー氏と落ちあう。クライナー氏はかつてウィーン大学からボン大学に移り、同大学から名誉教授の称号を贈られた。現在は法政大学国際日本学研究所の客員所員や、東京国立博物館の客員研究員を務めている。クライナー氏は「阿蘇 1.0」から「阿蘇 2.0」への連続性、そしてこの研修旅行の意義を関連づける講演をおこない、続いて 3 人の学生が調査計画について発表した。

3 日目、一行は阿蘇市に向かい、一の宮地域に立地する宮地駅に近い阿蘇青少年交流の家を拠点として、周辺を探索した。4 日目は阿蘇神社に詣でて、今後の神事に参加するための打ち合わせを経た。このとき、神社の宮司から 2016 年の熊本地震によって発生した阿蘇神社を含む聖地の再建問題について現状が語られた。その後、宮地周辺の街並みが調査された。5 日目、手野地域にある国造神社が調査され、地元の有志から同地域にとってのこの神社の意義が説明された。6 日目と 7 日目は週末で、行動は 3 つのグループに分かれた。阿蘇市の極楽寺で座禅を体験したグループ、阿蘇山の中岳に登ったグループ、年に 3 回実施される国造神社の大掛かりな清掃を手伝ったグループがある。

8 日目は手野で写仏をしたり、ホストファミリーと交流したりした。9 日目は西手野地区を構成する 9 つの村組での聞き取り調査に従事する。10 日目は翌日の御田祭で供物にする 粽^{ちまき} 作りを

手伝った。11 日目は国造神社で御田祭が実施され、参加した。とはいえ、女性は行列に入ることが許されず、男性も外国人ということで神輿を担ぐことは認められなかった。12 日目は西手野公民館で熊本大学の学生 5 名および地域住民とともに前日の御田祭について考察し、ワールドカフェの形式で意見交換を重ねた。13 日目は一の宮地域の阿蘇神社でふたたび開かれた御田祭に参加し、国造神社で開催されたものとの差異を観察した。14 日目が阿蘇での最終日だった。一行は熊本市に戻り、翌日の最終報告会の準備に励んだ。15 日目にその報告会が熊本大学で開催された。合同でスライドが作成され、発表がなされ、ワールドカフェの形式で意見交換の時間を持った。

2021 年夏になると、マンツェンライター教授たちはオーストリアのアルプス地方にあるザルツブルク州のディーンテン・アム・ホーホケーニツヒへと調査旅行に出かけ、阿蘇と比較考察する機会を得た。さらにゼバスティアンとハンノー・イエンチュさんは阿蘇へのデジタル調査旅行を計画し、2022 年 2 月に学生たちと実施した。2 週間におよぶこのフィールドワークは、コロナ禍によって日本に行くことが難しいという事情を背景としており、オンラインでのフィールドワークは先進的だが、もちろんさまざまな制約に縛られた。以下、これに参加した学生たちのブログ記事を要約するが (Aso 2022)、記事では日程が不明のため、これについては記載しない。

まず観光産業の実態、宗教的および社会的伝統の現状、高齢者への社会福祉、都市部から移住してきた人々の阿蘇体験という 4 つの調査テーマが設定され、それに合わせて 4 つの調査グループが作られた。ウィーン大学出身で熊本大学に努めるヴィルヘルム講師が現地でコーディネーターを務め、オンライン会議用アプリ Zoom をつうじた映像配信に貢献した。

まず理論が整理され、共同で使用される資源などについて、ならびに阿蘇地域を構成する複数の共同体について考察された。阿蘇郡西原村の村長から話を聞き、Google マップを利用した「デジタル散策」を試みた。柏木享介助教 (国学院大学) から阿蘇の宗教、民俗、阿蘇神社の歴史についての講義を受け、会議用アプリの Wonder.me を使って熊本大学の学生と交流した。ウィーン大学の出身者スザンネ・クリーン准教授 (北海道大学) にインタビューし、今後の活動について検討した。高森町の政治家や職員へのインタビューがなされ、この地域でも「デジタル散策」が実行された。さらにヴィルヘルム講師が車を運転しながら、Zoom をとおして南阿蘇村の景観や阿蘇の自然環境を伝えた。総務省の事業「地域おこし協力隊」に入って南阿蘇村で活躍する隊員、阿蘇市社会福祉協議会の職員、南阿蘇観光局会の委員などにインタビューがなされた。野焼きの伝統を維持し、阿蘇地域の緑地を保全し、次世代に継承していくための公益財団法人、阿蘇グリーンストックの施設が阿蘇市にあり、その場所の見学がなされた。最終日には数人の関係者を招いて、報告会を開催した。日程の全体をとおして、熊本地震やコロナ禍は繰り返えし話題になり、それだけに人々の希望や結束の強さが際立ち、阿蘇の回復力 (レジリエンス) が注目された。オンラインによるフィールドワークという画期的な試みだったが、始めから予想される通り、Zoom 映像の限界、連絡の煩雑さや、回答者につぎの回答者を示してもらおう雪だるま式標本法が採用できなかったことなどが、難点として意識された。

6. エスノグラフィー（2）—筆者の阿蘇旅行

2022 年 6 月 3 日から 7 日にかけて筆者は自身でも阿蘇を訪れた。「阿蘇 2.0」に従事するウィーン大学の人々と、日本人として京都に住む私が見るもの、あるいは見たいものは自然に異なってくると思われるから、それを示すことにも意味があると判断したのだ。とはいえ、筆者は阿蘇について本格的な事前調査をしたことはないから、伝統的な文化人類学でなされてきたような、現地の共同体に入って住民と密に接触しながら遂行する参与観察はできない。筆者は「阿蘇 2.0」で調査された場所の一部を日本人として見てまわることに、ささやかにでも意味があると考え、それを実行した。

阿蘇くまもと空港に到着した筆者は、空港のあちこちで熊本県 PR キャラクターのくまモンのイラストや商品を見かけた。店で熊本ラーメンを食べたあと、産交バスのたかもり号に乗って阿蘇山の南側、つまり南郷谷をとおって、バス停の高森町に行く。車内から、どこまでも農村風景が続くさまを眺めた。阿蘇は広大なカルデラ、つまり火山活動によってできた凹地に収まっている地域で南北 24 キロメートル、東西 18 キロメートルに達する。世界最大のカルデラだと主張する人もいるが、それは誤っていて、世界最大のカルデラはインドネシアのトバカルデラで、これは長径約 100 キロメートル、短径約 30 メートルに達する。阿蘇カルデラより随分と大きいのが、それでも阿蘇のカルデラは屈斜路カルデラについて日本第 2 位の規模を誇る。

阿蘇山には、阿蘇五岳と呼ばれる代表的な頂点がある。杵島岳、烏帽子岳、中岳、高岳、根子岳とそれらが順に見えてくる。最高峰は 1592 メートルの高岳だが、なんと言っても見応えがあるのは、ギザギザガタガタの印象的な冠をかぶっているように見える根子岳だろう。60 分ほどでバス停「高森中央」に到着する。そこに根子岳に関する伝説を記した掲示板「猫嶽の伝説」が立っている。「肥後んネコは七歳（ななち）なると、三日間あらんごつなるげな。どこに行くかちいうと根子岳に授業に行くてち。根子岳にネコの王がおって、そるから三日三晩、いさぎい稽古ばつけらすげなもん。そして、もうこりてよかろうちいうところで免許皆伝の印にガリッと耳ばかみ裂かるるったい。こぎゃんなりや大したもんで、仲間かりでん、ネズミかりでん、一目置かるるごつなるとたい」。筆者はグリム兄弟を焦点とした伝承研究を充実してきたから、こういうものに関心がある。

送迎のバスに来てもらい、ホテルに向かう。チェックインして、やはりあちこちでくまモンのイラストや商品を眼にする。根子岳が見えやすい場所を探して、しげしげと見た（写真 1）。この日、前の晩にあまり眠れなかったため、露天風呂に入ったり冷水を浴びたりしながら、体の緊張を



（写真 1）

ほぐすことにした。露天風呂から見える根子岳も素晴らしい。夕食はバイキング方式で、熊本らしい郷土料理がよりどりみどりだった。高菜めし、だご汁、馬肉のステーキ、あか牛のすき焼き、そして高森名物の高森田楽。魚のヤマメ、鶏肉、豆腐、鶴の子芋、季節の野菜などを囲炉裏で炙り、甘い味噌をつけて食べる。

2日目になったが、朝食も豪華だった。白米や味噌汁のほかに、さまざまなおかずやデザートや飲み物が用意されている。高森中央に送ってもらい、たかもり号に乗って阿蘇くまもと空港へ行く。そこで135分ほど待って、阿蘇山の北側、つまり阿蘇谷を進むバスに乗る。50分ほどでJR九州の阿蘇駅に到着した。駅の隣にはマンガ『ワンピース』のキャラクター、ウソップの銅像がある。いかにも日本らしいコンテンツ・ツーリズムへの仕掛けと言える。駅のなかのポスターを見てみると、「温泉むすめ」のキャラクター、阿蘇ほむらも眼に入った。美少女キャラクターを使ったコンテンツ・ツーリズムは、多くの男性オタクを熱狂させ、一部のフェミニスト女性に反感を抱かせている。これらは阿蘇の幸福度にどのように関与しているだろうか。

じつは阿蘇市の中心は、阿蘇駅周辺ではなく、ふたつ先の宮地駅周辺と言える。その近くに阿蘇全体の精神的中心と言える阿蘇神社が立っていて、地区は「一の宮」という特権的な名で呼ばれている。ウィーン大学の学生たちも、2018年のフィールドワークで、この地区を重点的に調査すべき地区のひとつに設定していた。阿蘇駅から宮地駅まで、50分ほど歩いた。おそらく地元の人にはふだんこんなにも歩かないのではなか。自動車がなければまともに生活していけない農村では、簡単に歩いていけるような距離でも自動車を活用する傾向が強いからだ。ただし、農村とは言っても鉄道やバスの路線が通っていて、家屋も近代化されているから、前近代的な「農村」のイメージからは隔たっている。筆者は、かつて住んでいた京都市の岩倉地区に似ていると感じながら歩いた。

宮地駅の近くにある阿蘇市立一の宮図書館に入って、しばらく体を休める。冷房が心地よい。郷土に関連する資料をしばらく見てまわる。それから北に進むと、すぐに阿蘇神社に到着する。この神社は阿蘇大神と見なされる健磐龍命を筆頭とする阿蘇十二明神を祀っている。健磐龍命は初代天皇とされる神武天皇の孫と伝えられるから、阿蘇を邪馬台国や高天原と比定したい人々の気持ちとがわからなくもない。拝殿は真新しく(写真2)、



(写真2)

その前にある桜門はすっぽりと箱状に包まれて、工事が進められている。つまり阿蘇神社は、2022年のいまなお2016年の熊本地震から再生していく過程にある。拝殿の前に教育勅語の碑文があり、これは勅語を起草した井上毅や元田永孚らが熊本出身だったことに由来する。願掛け石というものもあり、古い時代から神石として伝承されてきた岩の上に、いくつかの小石が散らばっている。縁結びの松があり、男性は左から2回、女性は右から2回まわると、恋愛成就の利益があるという。

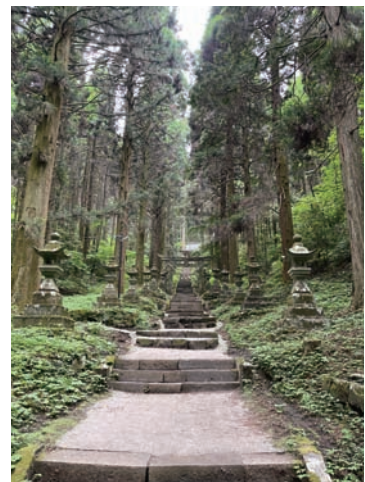
拝殿の正面から前方に参道が伸びる一般的な縦参道とは異なって、阿蘇神社は参道が横へと伸びていく、全国でも珍しい横参道を備えている。それを進むと、門前町商店街がよく賑わっている。案内板を見ると、カルデラの地下水は雨が溜まったもので、この雨の恵みのために、この地に阿蘇神社が作られたのではないかと説明されている。昭和時代やヨーロッパのレトロな生活用品が好きな私は、ある骨董屋の前にある謎の木馬に視線を吸いよせられた（写真3）。阿蘇の農村部にはさまざまなレトロな用品や玩具が残っていると想像されるが、それらと幸福度の関係が気になった。



（写真3）

北に行くと、ウィーン大学の学生たちが深く関わった国造神社もあるが、そこまで行くのは時間的に難しい。阿蘇では鉄道やバスが頻繁に走っているわけではなく、接続も良いとは言えない。何より阿蘇は広大だから、軌道的に動けない。おそらく、この一の宮の付近で1泊するのが望ましかったのだが、高森町に宿泊するのを決めてしまっていたから、そこまではるばる戻っていく。阿蘇くまもと空港でバスを待っていると、30分以上の遅れが発生した。職員に尋ねてみると、この空港と同じく上益城郡益城町にあるグランメッセ熊本で、歌手のあいみょんのコンサートがあり、渋滞が発生したとのことだった。車内に入れるだろうかと不安を覚えたが、バスが来てみると、まったくの杞憂だった。ホテルに帰り、夕食に行くと、2泊めということであか牛のしゃぶしゃぶが用意されていた。

3日目は南阿蘇や南郷谷と呼ばれる地域を探索した。自治体で言うと、阿蘇郡の高森町や南阿蘇村だ。朝から小雨が降るなか、国道265号線を北上した。歩道が狭く、明らかに徒歩向きではない一帯だ。先には黒緑色の陰影を見せる樹林に包まれ、長い階段を抜けなければ参拝できない神秘的な上色見熊野座神社がある。「色見」というのは、阿蘇大神、健磐あらいみたま龍命いわざみたいしょうぐんの荒魂いざなぎのみことにあたる石君大將軍の兜に伊弉諾命いざなみのみことと伊弉冉命が現れたのを祀ったとされる。階段を10分ほど登るが、かなりきつい（写真4）。この神社よりさらに北に行ったところにある上洗川神社にも興味があったけれど、そちらは諦めて来た道に戻り、さらに南下する。高森町に住む人に上色見熊野座神社への思いを尋ねてみたいと考えながら、90分ほど歩いた。



（写真4）

南阿蘇鉄道の高森駅に着く。駅舎は瀟洒で印象に残るが（写真5）、駅周辺の再開発と合わせて建て替えが準備されているらしい。近くの商店街を見てまわったところ、日曜ということもあつ

てか、ほとんど閉まっている。洒落た喫茶店でブラックコーヒーを飲み、しばらくしてから高森駅に入る。トロッコゆうすげ号というトロッコ列車が走っていて、これに乗って中松駅まで行き、そこで折り返してまたこの駅に戻ってくるというミニツアーが開催されている。雨は激しさを増していたから、全面的に霧がかかったような灰色の空間が広がっている。南阿蘇村の中央近くにある明神池名水公園が見えたとき、添乗員から写真を撮ると良いですよと助言されたが、雨がかなり降っているために、それほど冴えた風景には見えなかった。晴れていると、水の青と樹木の緑が美しいのかもしれない。中松駅から向こうの南阿蘇鉄道の路線はまだ熊本地震の傷跡を完全には拭えていなくて、運休中の状態で、全線が復旧するのは2023年の夏だと説明を受けた。往復の所要時間は1時間ほどだ。白川水源に行きたかったが、この雨では景観が冴えないと判断して、早めにホテルに戻った。3日目はあか牛のすき焼きが用意されていた。それをさっと食べて、食堂を出た。



(写真5)

思えば2016年秋に熊本市を訪れたのが、最初の熊本体験だった。あのときは数年ぶりにレコード収集熱が燃えていて、市内のめばしいレコード店を探索しては、さまざまな商品を購入した。上通商店街では、熊本県出身のマンガ家、江口寿史との大規模なコラボレーション展示が展開されていた。熊本城を見に行つたものの、その半年ほど前に発生した地震のために、一部が崩落した無惨な姿をさらしていた。それに加えて、あのときは個人的な人間関係に関わるややこしい出来事に巻きこまれていたから、熊本市をふたたび訪れるのは少しの緊張を伴った。

4日目、その熊本市を訪れた。高森中央から阿蘇くまもと空港を経由して通町筋に向かう。所要時間は100分程度だ。降りると、道の向こうに熊本城が見えている。名古屋城、大阪城、姫路城、熊本城の4つの城は、よく「日本三名城」に選出される。選出のたびにどれかひとつが選ばれないので、「日本四名城」で良いのではないかと、以前から思っている。城は2016年に見たのとは異なって、すでに修復されていた。熊本市役所に「熊本市政令指定都市移行10周年」との垂れ幕がかかっている。城の入り口近くに加藤清正像があり、しげしげと見上げる（写真6）。入り口に入ると、観光客向けの店が並んでいて、その奥に資料館を兼ねた券売所がある。その2階から城に向かう通路が続く。アジサイが美



(写真6)

しい（写真7）。天守閣が近づいてくると、昂揚が増す。天守閣を正面側から見ると、その端正さに溜め息が出る（写真8）。天守閣に入ると地下1階につながり、1階は加藤氏が支配した時



(写真7)



(写真8)

代、2階は細川氏が支配した時代、3階は近代、4階は現代に関する美術館として使用されている。5階には展示がなく、6階は展望台だ。展示も展望も充実していて、満足度は高い。上通商店街には、おそらく熊本でもっとも規模が大きい長崎書店があり、私が2022年4月に刊行した『イスタンブールで青に溺れる——発達障害者の世界周航記』（文藝春秋）も平積みされていた。この商店街の入り口近くにある熊本市現代美術館では、和田誠展が開催されていたが、前日訪問できなかった白川水源を訪れたいため、入館を断念した。阿蘇の人は、熊本県在住者として、熊本市や熊本城にどのような思いを寄せているのか、またそれが彼らの幸福度とどのように関係しているのかが気になった。

通町通からバスに乗り、「白川水源入口」まで90分ほどだった。降りると南阿蘇村の全体図があり、興味を惹かれる。もっと長く滞在できるならば、あちこちを訪問していただろう。白川は熊本県を流れる一級河川で、白川水源からは毎分60トンもの清流が湧きでているという。湧き水はそのまま飲むことができ、1985年に「名水百選」のひとつに選定した。敷地内には白川吉見神社があり、その近くの水面には天空の空色や葉叢の濃



(写真9)

緑が映っていて、美しい（写真9）。この「水がゆたかな地域」としての阿蘇への思いを在住者から聞いてみたいと思った。敷地から出ようとすると、「南阿蘇村震災遺構サイトマップ」と題する展示版がある。熊本地震の傷跡をいくつかの箇所であえて残そうとしているのだ。白川水源の近くには、古いガレージを利用した「昭和おもいで博物館」という施設が立地していた。無人で100円を集金箱に入れて入場する。明かりもなく、暗い空間に古めかしい生活用品や玩具、さらには農具などが無造作に放置されている。ほとんど荒れた廃屋と言って良い。ホテルに戻って夕食に行くと、4泊目の客たちのために马刺しとマグロの握りが用意されていた。これはとてもおいしく感じた。

翌日、筆者は京都に帰宅したが、熊本に滞在しているあいだは、現地の地名などをスマート

フォンでたくさん検索したから、数日のあいだ熊本に関するニュースがよく表示された。帰宅した翌々日には、「阿蘇地方の野焼き中止へ」と題する熊本放送のニュースが眼に飛びこんできた。ウィーン大学の学生たちが、野焼き問題に携わる阿蘇グリーンストックを訪問していたことが思いだされた。ニュースは伝える。「阿蘇地域では過去5年間で野焼きの延焼による林野火災が毎年10件ほど起き、今年も相次ぎました。／植林地などに延焼した場合、その被害額は牧野組合などが補償することになり、高齢化や組合員の減少が続くなか金銭的な負担も重くのしかかります。／瀬井さんたちは、代替策として草に水分が多く延焼しにくい秋に草を刈り、こまめに燃やすことで草原と生物の保全を維持したい考えです。／しかし、面積の広い牧野組合などの草原で野焼きを継続するには、延焼した際の補償を援助する仕組みづくりが急務だと話します」(熊本放送 2021)。これについても阿蘇在住者の見解を聞いてみたいと思った。

7. エスノグラフィー (3) ―阿蘇出身者へのインタビュー

SNSのフェイスブックでつながっている熊本県在住の女性から、阿蘇出身の女性 H. O. さんを紹介してもらい、Zoom によってインタビューをする機会を得た。

H. O. さんは1961年に生まれ、阿蘇の一の宮町で育った。家は農業で米(コシヒカリ)を作り、肉牛を10頭ほど飼っていた。父親が趣味で育てている馬も1頭いたという。経済的な苦勞が多かったと回顧する。「当時は文化的なものがなくて、阿蘇から出たくてたまらなかったですよ」と語る。

家にはいつも近所のおじさんやおばさんが遊びに来ていた印象がある。人との関わりが多く、それなりに楽しんだものの、自分の時間が取れないのには困っていた。自我が育つと、高校生くらいから自分のことも周りのことも見えるようになってきて、阿蘇の共同体の良さに気づきはじめた。「ここの人たちは優しいなって思ったんです。田植えの時期に、みんなで作業するんです。協力的だなあって」。他方で、その綿密な人間関係を鬱陶しいと感じることも増えた。女ばかり4人姉妹なのだが、近所のおじさんやおばさんが、「農業で土地があるけど、ここは、娘ばかりで大変だね」と、言っているのをよく耳にした。男なら家を継ぐが、女はそうではないという慣習が生きていたのだ。H. O. さんには自然と、男たちに負けないぞという気持ちが湧いたという。「女が継いでもいいじゃないかと思ってました。でも農業はたいへん。両親を見ていてそう思いました」。

H. O. さんは、教職の道を選んだ。大学を卒業し、地元の中学校に採用となり、4年間務めた。結婚と同時に、阿蘇の小学校に異動し、6年間の勤務後、宇土市と熊本市内の小学校に25年間のあいだ務めた。そして退職前の3年間、熊本市内の中学校に勤務した。公認心理士の資格を取得していて、心の健康の予防教育に強みがある。

26歳で結婚し、しばらく阿蘇に夫婦で住んでいたが、32歳で熊本県の南にある夫の故郷、宇土市に移ることになった。転居すると、阿蘇への思いが高まってきた。阿蘇の自然の豊かさへの誇りが高まり、住民が自分たちの食べるものを自前で作っていることに、改めて驚いた。「生き

てるな、という感覚があったことに思いあたって。現金収入は少ないんですが、近所の人が作ったものをもらい、こちらで作ったものを渡す。生活の実感があったんです」。

ウィーン大学での幸福度研究について読んでもらって、「阿蘇の幸福度は高いと思いますか」と尋ねると、「わからない」と答える。「たとえば阿蘇神社は誇らしいですか」と尋ねると、「いやそんなに思わなかったです」と、答える。「ほかの地域の人が、阿蘇には阿蘇神社があるねっと言うから、そういう外からの声で、ああそうなんだと気づきました。自分のうちから湧きでくる自覚ではなくて。でも家族や地域を誇りに思っています。帰省したら、かならず近所のおじさんおばさんが来てくれる。実家にいると、父や母が忙しくしてるから、私も農作業を分担して、忙しくしてます。役に立っている自分を感じるのはうれしい。役に立てている。その感じが、幸福といえば幸福かな」。

ウィーン大学の博士号チームが「喜んでもらう」という表現に注目していたことについても尋ねてみた。「その思いの強い人が阿蘇に特別に多いかどうかわかりません。でも、そうせざるを得ないと感じているのかもしれない。そうしないと、えっ、あの人どうなるんだろうって眉をひそめられる。「持ちつ持たれつ」の考えが強い地域です」。

個人的に気になったコンテンツ・ツーリズムについて尋ねてみた。「ピンと来ないです。ああ、あるなと。最近そう言うのが多いということがわかるけど、それ以上興味が深まらなくて」。昭和レトロなものについても尋ねてみた。「当たり前で気づかない感じ。昭和ブーム、懐古趣味的なものは、阿蘇ではないと思います。どんどん壊されていくけど、昔のものへの興味が薄い」。阿蘇をあちこち歩きまわってみて、真新しい建物がたくさんあるのが印象に残ったことを思い出した。

H. O. さんは一の宮出身だから、阿蘇谷の中心地域に詳しい。南郷谷についてはどのように感じているだろうか。「高森町は新しい装いの建物がたくさんありますね。阿蘇谷のほうが昔風に残しているところが多い気がします。阿蘇谷の北にある小国町はまた違いますよ。阿蘇は三つに分かれてるって感じがします」。

阿蘇では水の豊かさが強調されているが、それについてはどう考えるだろうか。「阿蘇の水は、ほんとうにいいです。熊本のなかでも阿蘇の水は格別においしいですね。国造神社なんか、湧きでる水がほんと綺麗で、クセのない味で。阿蘇の水はおいしいなって、阿蘇を離れてみて実感しています。でも水害を経験したことがあります。30年前、宮地の東にある坂梨で、土石流が流れてきて。水って怖いなと怯えました」。

野焼きについてはどうだろうか。「父が野焼きに出ましたから、火傷をしないか、よく心配をしてました。野焼きは、ぱあっと燃えて綺麗ですね。反面、襲いかかってくるような感じがして怖かったです。自然と闘っている、自然と共に生きているということを感じました。一面ずっと火をつけて真っ黒になる様子とかがすごい。力強いというイメージがあります。住民のみんなで作ってましたね。いまは観光客向けの野焼きもあるんですけど」。

マンツェンライター教授は、阿蘇が熊本市に近いことは、幸福度の高さに関与していると考え

ていた。「JR が通っていて、交通の便が整っているのは強いですね。熊本駅と宮地駅って終点同士なんです。終点から終点へ。熊本市の水前寺公園も水がきれいでした。熊本市のいろんな祭りも好きです。火の国祭りとか。阿蘇でも豊作を願って、四季折々お祭りをしながら一体になり。あとは熊本城は好きです。名物のからし蓮根もいいですね。阿蘇にも高菜づけがあるけど」

阿蘇にも熊本市にも同様に愛着があることを語ってくれたことが印象的だった。他方、より大きな自治体の「熊本県」については意見が出ないのは意外だった。そこで「自分は九州の人間なんだ、とか日本人なんだ」とか、そういう「阿蘇」や「熊本市」を超えた「誇り」のようなものはありますか」と尋ねた。H. O. さんは語る。「ないと思います。ほかの地域の人たちと自分たちの違いを比べる機会が少ないから、わからないのかもしれない」。

私と H. O. さんと、H. O. さんを紹介してくれた女性は、「対話実践」という関心でつながっている。共同体での対話の豊かさは、人間の幸福度に大きく関与するのではないだろうか。H. O. さんに阿蘇での「対話」について聞いてみた。「阿蘇の人は対話が得意だと思います。健康的です。いま思えば、いつも近所の人が来ていたから、それで力がついたと思います。わかるように話すのではなく、本音の出しあいのなかで、わかりにくい言葉を聞きながら学んでいきました」。H. O. さんの人間理解は、近所のおじさんやおばさんによって、大きく鍛えられ、それが対話力の土壌になった。

H. O. さんは阿蘇市、宇土市、熊本市のそれぞれに関わって生きてきたのだから、この三つの共同体を比較してもらいたくなった。「人の距離の取り方が違うんです。阿蘇は、すごく近い。病気したら、近所の人同士で声を掛けあっています。宇土も親戚同士はよく集まるんだけど、近所との交流はありません。熊本になると、もっと核家族化していて、人間関係が希薄」。農村部の阿蘇市、都会の熊本市、その中間にある宇土市で人同士の距離感が異なっている。

最後に、阿蘇に住む人の幸福度の核心がどこにあると思うか、私見を述べてもらった。すると H. O. さんは「自然です」と断言する。阿蘇カルデラの北の端にある、阿蘇五岳を含めてカルデラを一望できる大観峰について語ってくれた。「大観峰から見たら、阿蘇の自然がほんとうにすごいから。祖先はよくここに住もうと思ったなと。阿蘇への思いは強いです。実家を出てから、本当に強くなりました。大事にしたいです」。

インタビューを終えるにあたって、H. O. さんは、筆者が阿蘇をまた訪れたときには、ぜひ連絡してほしい、実家にも遊びに来てほしいと言ってくれた。これが「阿蘇人の歓待精神」なんだと感じ、私も笑顔を見せた。私はほかの人にもインタビューしたいと考え、H. O. さんにふたりの親戚を紹介してもらった。しかし、これは残念ながら実現しなかった。H. O. さんは、ふたりともインタビューを快諾してくれたとメールに書いてくれたが、片方の人は、私からどれだけメールを送っても返事をくれることはなく、もう片方の人も最初は応対してくれたが、やがて音信不通になった。謝金の支払いに関する手続きのややこしさに、辟易してしまったのかもしれない。あるいは、「阿蘇仲間」への意識から親戚の H. O. さんには良い返事を与えたものの、実際には乗り気でなく、私への対応を面倒に感じてしまったのかもしれない。インタビューは H. O.

さんに対するものだけになったが、貴重な意見を聴取できたと思う。

8. おわりに

筆者自身がフィールドワークやインタビューを実施してみて、「阿蘇 2.0」がこのようにして日本人による阿蘇調査とも連携し、日本内からの視点とオーストリアからの視点を総合できれば、さらに優れた研究になるのではないかと考えた。オーストリア人の関心と日本人の関心のあいだには、当然ながらさまざまなズレがあると予想されるからだ。「阿蘇 2.0」が学際性の豊かなプロジェクトなだけに、国際性の点でも厚みがあると、さらに魅力的になると思われる。

しかし全般的に言って、ゲルマニスティク（ドイツ文学研究）を専門とする筆者にとって、ウィーン大学の日本学には、繰りかえし感嘆させられた。ゲルマニスティクは、筆者が博士論文『グリム兄弟とその学問的後継者たちに関する研究』で示したように、ドイツ語を用いた総合的な文献学として成立し、それが専門分化することによって、「ドイツ文学研究」へと洗練されるとともに狭隘化したという経緯がある。ヨーロッパの日本学の歴史は、その逆の印象を与える。初めは日本に関する文献学として成立したのに、時代の要請に合わせて、人文学のさまざまな分野や、社会科学の方法を大規模に取りこんで、現在まで続いている。日本学とゲルマニスティクのそれぞれに、異なる生命体がそれぞれ有する有機構造のようなものを感じずにはいられない。

かつてゲルマニスティクの祖のひとり、ヤーコプ・グリムは、もともと専攻していたローマ法制史がフロンティアを失っていること、新たな研究分野に定めたゲルマニスティクにはそのフロンティアがどこまでも広がっているという趣旨の発言を手紙に残したが（Schoof 1953: 29）、いまではゲルマニスティクがかつてのローマ法制史のような状況に陥っていて、フロンティアはほとんど消滅してしまっている。日本学の状況は逆にある。日本という国自体は、さまざまな点で破局へと向かう兆候を見せているものの、日本学には広大なフロンティアが広がっているのだ。

参考文献（引用または参照を指示したものに限る）

ヴィルヘルム、ヨハネス「ヴィーン大学における阿蘇研究の過去と現在」、『熊本学園大学経済論集』26号、2020年、231-247ページ。

熊本放送「阿蘇地方の野焼き中止へ 草原の維持には野焼きは欠かせないが…苦渋の決断にある背景とは」、TBS NEWS DIG、2022年6月8日。（<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/63897>）
クライナー、ヨーゼフ『阿蘇に見た日本——ヨーロッパの日本研究とヴィーン大学阿蘇調査』、一の宮町史編纂委員会（編）、一の宮町、2000年。

チェンバレン『日本事物誌2』、高梨健吉（訳）、平凡社、1969年。

横道誠『グリム兄弟とその学問的後継者たちに関する研究』、京都大学文学研究科（博士論文）、2022年。

- 横道誠『ある大学教員の日常と非日常——障害者モード、コロナ禍、ウクライナ戦争』、晶文社、2022年。
- Askitis, Dionyssios / Miserka, Antonia / Polak-Rottmann, Sebastian, “Exploring Rural Well-Being through an Interdisciplinary Lens — The “Shrinking, but Happy” Research Team at the University of Vienna,” *Asien* 158/159 (Januar/April 2021), S. 161–176.
- Aso 2018, “Aso 2.0 Forschungsblog der Exkursion im Sommer 2018,” Universität Wien. (<https://japan.univie.ac.at/?id=83235>)
- Aso 2022, “Aso 2.0 Digital Winter Field School 2022,” Universität Wien. (<https://japan.univie.ac.at/asoblog/>)
- Holthus, Barbara / Manzenreiter, Wolfram, “‘Bullseye View on Happiness’: A Qualitative Interview Survey Method,” *Studying Japan. Handbook of Research Designs, Fieldwork and Methods*. Ed. by Nora Kottmann and Cornelia Reiher. Nomos (Baden-Baden) 2020, S. 151–156.
- Manzenreiter, Wolfram, “Rural Happiness in Japan: Contrasting Urban and Rural Well-Being in Kumamoto,” *Rural Areas Between Decline and Resurgence. Lessons from Japan and Austria*. Ed. by Ralph Lützel. Wien: Universität Wien 2018, S. 43–64.
- Manzenreiter, Wolfram / Holthus, Barbara, “The Meaning of Place for Selfhood and Well-Being in Rural Japan,” *Rethinking Locality in Japan*. Ed. by Sonja Ganseforth and Hanno Jentsch. Routledge (Abingdon, Oxon) 2021, S. 69–84.
- Schoof, Wilhelm (hg.) : *Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Aus dem Savignyschen Nachlass*. Berlin (E. Schmidt) 1953.
- [UN] World Urbanization Prospects: The 2014 Revision. 2014 (<https://population.un.org/wup/publications/files/wup2014-report.pdf>)

(2022年9月27日受理)

(よこみち まこと 文学部欧米言語文化学科准教授)